
あの、そこ私の席なのですが

道案内

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの、そこ私の席なのですが

【Nコード】

N9779Y

【作者名】

道案内

【あらすじ】

偶然、自分の席に座るクラスメイトを目撃してしまった加奈。その日以降、彼の数々の行為に振り回される羽目に。★無口美形ワンコに溺愛される平凡少女のお話です★

あの、そこ私の席なのですが

「……」

慌ただしく教室の扉を開けた桑原加奈は、目の前の光景にそのままの姿勢で固まった。

三時間目と四時間目の間の休み時間。次は移動教室の為、人はほとんど残っていなかった。加奈も途中でノートを間違えた事に気づき、あわてて引き返してきたのだ。

教室の中に残っていたのは二人の男子生徒。

「あっちゃー…」

此方を見て、気まずげに顔を引きつらせるクラスメイトの松本君と、……気のせいでなければ加奈の席に座り、加奈の机にしがみついているもう一人。

「……」

窓際の後ろから二番目、そこは間違いなく加奈の席だ。

此方に後頭部を向けている人物の頭は、上下に激しく揺れている。頬を机にスリスリと擦りつけて……擦り、付け……。

「荒川、荒川」

立ち尽くす加奈に背を向けて、誰かさんの肩を揺する松本君……
……って荒川君!?

「……なんだ、邪魔するな」

顔も上げず、不機嫌そうに答える荒川君らしき人……というか邪魔ってなんですか。

「いやいや、ほら、見られちゃったから」

「だから邪魔す、……なに？」

のっそりと松本君を見上げた荒川君の視線が、扉の前で立ち尽くす加奈の方へと向き、止まった。

切れ長の一重の目を見開き、微動だにしない荒川君らしき人、……いや荒川君だね、うん。何してるのさ、荒川君。人の席で。その両手は未だに加奈の机をしかと握りしめたままだ。

「「「……」」」

三人の間に、とてつもなく重い空気が流れる。その静寂を破り松本君が口を開いた。

「あー桑原さん、どしたの？」

「……それはこっちの台詞なんだけど」

「……だよーあは、は、はは」

松本君のわざとらしい笑いが響く中、荒川君は此方をじっと見つめたままで動かない。

その視線の激しさに、加奈の方はとても荒川君を見返せない。

「あーやばいよー次始まっちゃうよー」

白々しさも全開の口調で松本君は言い、荒川君の腕を掴むと、ぐいぐい引きずるように加奈の横を通り過ぎ

「桑原さんも急いで急いで、遅れるよー」

そのままズルズルと荒川君を連れ、出て行ってしまった。その間も荒川君の熱視線は外れないままで。

「……なんだったの」

どっと疲れを感じながらも、ノートを取り出すために机に向かう。……一応、我が机に何かされてないかもチェックするためにも。

意味が分からない

結局、次の授業へは少し遅れてしまった。いや、だってほら、異常がないか念入りに調べてたら……ねえ。

すみませんと頭を下げた時も、とある方向から重い視線を感じるような……気のせいだね。

教室での席がそのまま反映されているので、窓際後ろから二番目の席へと腰を下ろす。

「えーそれでは、教科書23ページの……」

教師の言うままにページを開くも、内容なんてちっとも頭に入っていない。

思い浮かぶのは先程の出来事ばかりで。……結局あの二人、というか荒川君は私の机で何をしてたんだろう。何やら机に頬擦りでもしてたように見えたけど……いやいや、そんな馬鹿な。

あの二人、タイプは違うものの、二人揃って超モテ男だし。

華やか美形の松本啓介君。

ふわふわの茶色い癖っ毛に、甘い垂れ目の整った顔立ち。巧みな話術で距離を縮め、常に数人の女の子と付き合っているという噂。

……さっきみたいにぎこちない松本君なんて初めて見た気がする。常にある余裕オーラもなんか消えかけてた感じだし……んー？

そして問題のもう一人、冷徹美形の荒川祐也君。

常は無表情なその顔は凄まじく整っていて、一切の隙がない。癖のない黒髪に切長の瞳。三秒目が合ったら、どんな女でも惚れさせるという逸話さえある。

最も、告白してきた女の子は全て一刀両断してるらしいんだけど………ってイタイイタイイタイ。何だか痛い気がする。体の右側が凄まじく痛い。

ちなみに

私、窓際後ろから二番目。

荒川君、廊下側の一番後ろ。

おまけで松本君、私と同じ窓際の一の前。

まさかと思いつつ、チラリンと右斜め後ろを向く………ええええっ！

め、目、目が合った………！！

一番奥の人と（荒川君なんだけど）合っちゃったよ！！

「……」

確認。

……えええつ。私、何かしましたでしょうか。

うろたえたら負けだ

「〜であるからして、このように〜」

あと10分、あと10分。

チクチクくる視線に耐えること30分。心なしかお腹も痛くなってきた気がする。

「え〜次に、問2と問3を」

あーもー早く終わっ

「荒川、桑原。前に出て解いてみる」

ぎょへえええっつ、なんですとっ!?!わ、私ですか。顔が引きつるのが分かる。

「なーんか集中してないからな、お前ら。」

化学担当の山下先生が、半笑いで言ってくる。

「ほらほら、早く前に出ろー」

ううっ、ツイてない。泣く泣くノートを片手に立ち上がる。ガタツともう一人も立ち上がる音も聞こえる。こうなったら、さっさと終わらせて席に戻ろう。幸いなことに答えは分かっているし。

周りを見ないように足早に黒板へと向かう、松本君の傍を通る時はちよびつと息をつめてしまったけど。

えーと、チヨークチヨーク……

……え？

ピキッと教室の空気が固まったような気がする。というのも全て、私のすぐ横にいらっしゃる方のせいなのですが。

〈回想〉

えーと、チヨークチヨーク。あ、あった………え？

私がチヨークを掴んで三秒後、私の手に一回り大きな手が重なりまして。横を見やれば荒川君。

あ、なるほど。荒川君もチヨークを探してたんですね。にしては三秒のズレがあったような気もしますが。では、コレは譲りますよ。私は他のを、他のを……

〈回想終了〉

……あの、手を放してください。

遠慮します

「……あー、荒川？どした？」

静まり返った教室に、山下先生の声がむなしく響く。

先生っ、もっと言ってやってくださいっ！明らかにこの方、おかしいんです！

背中を冷たい汗が伝い落ちる。う、動けない。これから私にどうしろと……っ。

俯いた視線の先に、私の手をがっしりと掴んでいる手が映る。ちょっと力を入れてみるも全く動かない。チョークが欲しいなら譲りますからっ、まず手を離してくださいいいいっ。

ぐっぐっと静かな攻防が繰り広げられる中、ガタツと誰かが椅子から立ち上がる音がした。縫るような思いでそちらに目をやる。

「荒川、荒川」

どうどう、とまるで野生の大型動物をなだめる様に、松本君が歩み寄ってきていた。

「あーごめんね、桑原さん。どうもコイツさっきので振りきっちゃったみたいで」

苦笑しながら、何やら訳の分からない事を言う松本君。フリキツタって何ですか？

「ほら荒川、お前もいい加減にしとけよ、授業中だぞ？」

ポンポンと荒川君の肩を叩く松本君。それに合わせて恐る恐る荒川君へと視線を向けると、私より20センチは高いであろう顔と目が合う。

「「……」」

気のせいでしょうか、握られた手に更に力が入ったような……。

「あー……お前ら、とりあえず席戻れ」

山下先生の疲れたようなような声に、ぎこちなく、握ったまんまだったチョークを放す。

えーっと席に戻れだそうですよ、荒川君。って松本君、さっさと戻らないでください。この人を置いていかないでください。

不意にグイッと手を引かれる。え、え、と混乱状態で、荒川君に手を引かれるまま歩きます。

ひいひいっ、し、視線が、視線が刺さる。あえて見ないふりをしていましたけど、クラス中の視線がグサグサ刺さってるっ。いっそ気を失いたくなる中、自分の席へとたどり着く。

……あ、荒川君の席はこの列じゃないんですけど、なんですか、わざわざ連れてきてくれたんですか手を繋いで……ううっ。

あ、はい座ります。椅子を引いてくれなくても座りますから。荒川君もどうぞ自分の席に戻ってくださいっ。ってなんですか!?!なぜ手を握っているのとは逆の手で頭を、頭を撫でるのですか……?!

そのまま、クラスメイトがガン見する中、チャイムが鳴るまで撫で続けられた。

……席に戻ってください。

怒らないので正直に言ってください

「……じゃあ今日はここまでな」

チャイムの後、山下先生が力なく告げるも誰一人、前を見ようとしていない。私の頭を撫でくり回しているこの方も、手を止めようとしていない。か、顔が上げられない。……って心なしか触れてくる範囲が広がってきているような気が……っ。

「ハア……とりあえず、荒川は席に戻れや」

ほら日直、号令ー、心底疲れたというように山下先生が言い放つ。その声に、ぐいぐいと触れていた手をそつと離れた荒川君は、じい……と私を見つめた後、くるりと踵を返し席へと戻って行った。

起立、という日直の声にヨロヨロと立ち上がりながら、私は平穏な生活の終わりを悟った。

に、逃げたい……。

俯いていても感じる視線の嵐。授業が終わったにも関わらず誰も教室に戻ろうとしない。驚愕、好奇、嫉妬、あらゆる意味を含んだそれらが私に集中している。

そんな状況下にもかかわらず、あろうことか山下先生は早々に出て行ってしまった。……先生、確かに以前から放任主義だとは知っていました。これはあんまりです。

徐々に大きくなっていくざわめきに心折れそうになりながら、素知らぬ風に動き出す。向かうは斜め前の席の友人、長谷川美紀だ。私を巻き込むなというオーラをばし出し出す美紀に構わず、細い手首を鷲掴みそのまま足早に特別教室を後にした。

「はあ、あんた何したのよ」

廊下を二人早足で進みながら、面倒くさげに美紀が問いかけてくる。

「……何もしてない」

精神的な疲れをどっと感じながら、力なく答える。

「ほんとに？」

整った顔を訝しげに歪める美紀に、再度うなずく。ホント理由があるのなら私が教えてほしいくらいだよ。確かに人の机で何かしてる荒川君に遭遇はしたけど……あれって、

「あんた気付いてなかっただろうけど、三谷とか凄かったわよ」

考えを巡らせていると、隣からの笑いを含んだ声に遮られた。

「え？」

「あ、やっぱ気付いてなかったのね」

はあ。自分の状況にいいいいで、周りを見る余裕なんてとてもとても。ミタニ、というと三谷蘭子さん？荒川君の事が好、きだと公言している……ひいっ！？

「なんか般若みたくなってたわよ」

くすくすと軽く告げる美紀に理不尽な怒りを覚えそうになる。あははじゃないよ！あ、あの三谷さんに目を付けられでもしたらどうすんのさっ！ああなんだか息が苦しくなってきた気がする……。

「あ、二人とも遅かったねー実験でも長引いたの？」

なんとか辿り着いた教室では、いつも一緒にお昼を食べる隣のクラスの友人、石森さくらが待っていてくれた。その温かな笑顔に抱きつきたくなる。だが、今はそんな時間はない。いつもは此処で食べているが今日はとても無理だ。

不思議そうなさくらに謝りつつ、各々弁当を手に教室を出る。ごめ

んさくら、今は説明する時間も惜しいんだ。美紀はなにやらめんど臭そうだが気にしない。親友の一大事でしょうが！

めったに利用する事のない食堂へと落ち着き、やっと一息つく。

「加奈ちゃん、どうしたの？」

こくりんと可愛らしく首を傾げるさくらに癒されつつ、口を開こうとしたその時食堂の空気が波打った。そこかしこから小さく嬉しげな声が上がる。それにひっかかるものを感じ、ふと視線を巡らすと、食堂の入り口から此方に歩いてくる二人の人物、が……！？

カキンと固まるこちらを余所に、その非常に目立つ二人は私たちと同じテーブルに腰を下ろした。

……え？確かにこの食堂のテーブルは六人掛けだから、まだまだ余裕ありますけど。でも周りを見て下さい？まだまだ無人のテーブルが山ほどありますからっ。ほら周りの皆さんもなにやら不審がりますよおお。

固まったままの私に、心底メンドーと言いた気な美紀、不思議そうなさくら。

「あーごめん、俺らもいいかな？」

キラキラ笑顔で聞いてくる松本君。だけどその笑みはもう私には胡散臭いものにしか見えないっ。

「えーっと？」

さくらが此方にくりくりお目々で尋ねてくるが、答えてあげられる余裕はない。なぜ元凶がここに……。しかもまたしても私の顔を凝視してるし近い近い近過ぎる！！

さくら 空席 松本君

テーブル

美紀 私 荒川君

ガタタツと椅子を動かして更に距離を縮めようとする荒川君。ひい、美紀、美紀もっとそっちに詰めて！当たってる当たってるからっ肩腕足が当たってますから！

食堂の空気が凍りつくのを感じる。信じられないと此方を凝視する目、目、目。あああ本当に倒れてしまいそうです。

「……とりあえず食べましょ」

淡々とした美紀の声に気を落ち着け、お弁当の包みに手をかける。簡単な結び目なのに異様に時間がかかります、手が震えているのは

気のせいです……って

え……？

「加奈？」

動かない私を呼ぶ美紀の声が聞こえるけど、反応できない。

ええつと……え……？

今朝、母が作ってくれたお弁当を包んだのは私。きちんとお箸も入れた。紅いウサギが可愛い箸入れを………なのに、なぜっ割りばしが私の包みの中にいつ！？

ばっ、反射的に右隣を見る。私の三倍はある大きなお弁当を広げている人物の右手には

お、お、お、お前かああっ！！

怒らないので正直に言ってください（後書き）

お気に入り登録、ありがとうございます。

感想いただけると嬉しいです（〇〇だったの一言で構いませんので）

か、かわかわかわ

荒川君の右手、その大きな手が持つには違和感バリバリの紅いお箸。ちっちゃなウサギが三匹プリントされてるそれは……私のですよね？

ナゼドウシテナンノタメニ……背中が寒くなってきました、そこから目が離せません。

というか何時私のお箸が、この方の手に渡ったのでしょうか……登校して机の横にお弁当を入った手提げかばんを掛けて、それから四時限目の移動教室まで私は席を離れなかった、箸……うん。

となると、やはりあの時……なのでしょうか。人の机に座りこみ、荷物を漁って箸を入れ替、

「……荒川、あんたさあ」

左隣の美紀も、私の異常の原因に気付いた様で溜め息を吐くと、呆れを含んだ声で続ける。

「それ。その箸、加奈のでしょ。なーんであんたが持ってるのよ」

ああ美紀さん美紀さん美紀美紀さん！よくぞ聞いて下さったっ。そうなんだよ、この人ちよつと変なんだよ。無視してたけど、この状況下でさえ足が何か変な動きしてるしっなんでそんな擦り付けるように動いてるんですかっ！

ヨ、ヨシ。美紀にだけ任せるわけにはいかない。私も言わなきゃ…

…女には言わなきゃいけない時があるんだっ。幸い此処には美紀もさくらも、胡散臭いけど松本君だっている！

ぐっ、目に力を入れて荒川君を見据える。相変わらず目が合うけど……負けない！

「あ、ありゃかわくん!!」

ひああああ緊張で口が回ってない。
負けてる、最初からなんか負けてるよ私っ。ふうーふうー落ち着け、明らかに分はこちらにあるんだからっ！

って荒川君、なにテーブルにつっ伏してるんですかっ。私はあなたに言いたい事があるんですよっ……ってなんか荒川君の大きな体が小刻みに震えてるような。うわっ反動でテーブルまで揺れてるっ、
ああお弁当が落ち

「……かわいい」

はい……？今なにか仰いましたか？

目の前のお弁当を押さえたまま右下を向く。

机に伏せたままの、此方を見上げる荒川君と目が合う。

「かわいい……加奈」

はいいいいいい！？

気をしっかり持て

返り討ちです。

意気込んで問い詰めようとした所、見事に返り討ちにされました。

カワイイ、カナって聞こえたんですが……可愛い？というかなナとはもしかしなくても私の事でしようか。下の名前で呼ばれるほど親しくはないというかわりも無いというか。茫然としたまま、ぐるぐると思いを巡らせる。

ぼけっと見つめる先、のっそりと荒川君が上半身を起こし、手を動かす。そのままお弁当の上に乗っている私の手を丁寧な仕草で外し……って！

「な、な、な」

なに自然な感じで盗っていつてるんですか！それは私のですよっ。大体あなた、自分のお弁当があるじゃないですか、なに人のまで欲しがってるんですかっ。

いそいそと（……うん、目の錯覚だろう）蓋を開けようとする（うきうきオーラが出ている気がする）荒川君の腕を掴んで止める。

「……？」

何故止めるのか分からないとでも言いたげに見つめられ、思わずたじろぐ。でもでもでもっそれは私のですからっ、この場合おかしいのは荒川君の方っ。

ひるまず腕を掴んだまましていると、不意に荒川君が頷いた。分かってくれたのかと涙が出そうにな、

「半分」

「……え？」

「半分こ」

いやいやいやいやそういう事じゃないんだよ。おかしいでしょう、明らかに。

誰かこの人に常識を教えてあげてください。私の手にはおえません。

助けを求めて振り返る。

真っ直ぐお弁当を見つめ、黙々と口に運ぶ美紀。

ミニトマト片手にモゴモゴと口を動かすさくら。目線が合っ
てなあに？と傾げられたお顔が可愛いです。

紙パックコーヒー牛乳のストローを銜えたまま、生温かい目でこちらを見ている松本君。

「……もう半分こでもなんでもいいから、はやく食べなさいよ」

こちらを見もせず投げやりに言う美紀に、なんだか泣きたくなった桑原加奈、十六歳です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9779y/>

あの、そこ私の席なのですが

2011年12月2日20時14分発行